

## 『命をかけてまでする意味』

明星学園 宮下 智

その日、R男さんは、全く食事を拒否した。朝から一口も食べないのである。今から三年前の夏のことである。まさかその日から、彼の完全拒食が一週間以上も続くことになろうとは、もちろん誰も考えることはできなかった。

❖ ❖ ❖ ❖ ❖

彼には発語が無い。今の彼には「ウー、オー」の唸り声が発声として残っているだけである。二十数年前には、抑えきれない精神と身体とを抱え、眠ることもできず、NHK教育放送・続基礎英語の副読本を片手に「ABCイエーイエー」などと叫び続ける夜が続いた。畜舎の鶏が目覚め出すその鳴き声に合わせて、「コケコッコー、イエーイエー」と大声を張り上げながら、廊下を走った。職員の眼鏡を奪い、腕時計を付けたがった。右手は常に口に運ばれ、反復的に舌を強く引っ張りだした。

食事はと言えば、立ったり座ったりを繰り返しながら、大きめのスプーンで、丼から口に詰め込んだ。汁もこぼれ、食材もこぼれた。

そして、その精神の変調は、父親の葬式に出席した夜からだったと聞く。

大量の精神安定剤が処方され、その副作用か身体が傾いた。毎月のように処方が検討され、安定した夜間の睡眠確保と日中の適正覚醒に治療のターゲットが置かれた。

悪戦苦闘の数年間の後、回復の兆しが次のようにして現れた。

きっかけは一年に二回、合計六日間程だった帰省を、毎月一回の二泊三日、年間の合計にして四十日間程にしたことだった。

父親の逝去以来、彼の帰省は母親が自動車の運転免許を持っていないという理由で、激減していた。職員集団も、いとも簡単にそれが当然かのように、その状況の変化を受け身的に引き受けていた。「だってしょうがないじゃないか、お父さんが亡くなったんだから」と。

しかし、その状況を彼の立場で考えたなら、とてもそんな悠長な話ではない。父親が亡くなったことも、母親が自動車の運転免許を持っていないことも、彼の預かり知らぬことなのであるから…。そんなに簡単に帰省が減ってしまっただけでは困るのである。彼が一番楽しみにも、心の支えにしているのが、帰省時に母親との一緒に過ごす時間なのであるから。

そこで、旧知の福祉事業者に彼の帰省の送迎を依頼し、母親の仕事の休みの週末に帰省することができるようになった。

職員集団にしてみれば、とても威張れるような画期的な支援方法ではない。精神安定剤の調整くらいしか打つ手がなかった数年間の支援の罪滅ぼしのような気持ちだったに過ぎない…。強いて言えば、置かれた状況を「しょうがない」と簡単に受け入れたりせずに、あくまでも本人中心に、その気持ち、そのニーズに寄り添いながら、どれだけ具現化して実践・支援できるかという視点に立てるようになったことが職員集団の成長と言えるのかもしれない。

月一度の帰省が始まってしばらくした頃、気がついたら反復的な右手で舌を引っ張りだす行動が無くなっていった。帰省では、母親は父親の墓参り(必ず母親と二人一緒に、お墓まで散歩がてら出かけている)と、彼の大好きな手作りカレーライスを作ったことが無かった。

昼間の眠気が増える度に(精神状況が良好になれば、それまでは適量だった精神安定剤の負荷が高まり、副作用として眠気が強くなったり、足元がフラフラしたり、食欲が減退したりする)、精神安定剤が少しずつ抜かれ、そして最後には服薬が無くなった。いつしか体の傾きも少なくなり、ずっと立っている姿がみられるようになった。

そして、その頃から、支援がうまくいっているかいないかを、彼は「食」を通して教えてくれるようになっていく。職員との外出のかたがが決まっていないうち、彼は食事を口の中に詰め込んだまま、なかなか飲み込もうとしないことで、それを教えた。帰省の日程があやふやな時、彼は右手を盛んに口元に持っていくことで、それを教えた

(昔の舌を引っ張り続けた名残りがここにある)。約束されたカレーのレトルトが食事に出されていない時、彼は食事をぼろぼろとこぼすことで、それを教えた。そして、今回の拒食…。

❖ ❖ ❖ ❖ ❖

決められていた外出のかたちに問題があるのではないか、個別支援計画に記載されているような基本的な支援が、うっかり提供されないままになっているのではないか、帰省の約束はきちんとされ、帰省のかたちは、母親の承認を得ているのか等々、思いつく限りの支援が提供されたが、二日が経ち、三日が経ち、それでも彼は何も食することが無かった。プリン、カロリーメイト、ウイダーインゼリー、好きなはずの全ての食材を拒否した。もともと痩せ形の彼であるが、みるみる体重が落ちた。キログラム単位の減少である。

通院、検査、全て異常なし。点滴での栄養補給が始まった。一週間がたった。

万策尽きて、誰かがふと呟いた。「お母さんの誕生日、いつだったっけ？」調べて驚いた。彼の食べなくなった日と母親の誕生日が同一日だった。

R男さんに尋ねる。「お母さんに誕生日プレゼントしたかったのかな？」彼は、どこかで微笑んだようだった。すぐに写真カード選択が始まる。彼はさっそく『帽子』を選択する。みんなでその選択に感動してしまう。だってお母さんは、いつも帽子をかぶっているのだから。「そういえばお母さん、いつも帽子をかぶっているよね。お母さんと言えば、帽子だよ。R男さん、本当にお母さんのことをわかっているんだねえ」と。

だけど彼は、まだ食事を受け付けない。

そこで、体力的には、ヨレヨレ状態の彼だったが、一緒に『帽子』の買い物に。素敵な『帽子』が選択されて帰園。職員誰もが、これで食事を食べてくれるものと期待した。しかし、それでも彼は食事を拒否した。

ならばと、今度は『帽子』の郵送だ。クロネコヤマトの配送所まで出かけて、母親のもとへ。しかし、それでも彼は食事を拒否する。最後の仕上げは、母親への電話。

「お母さん、誕生日おめでとう、今まで本当にお世話になりました。今、クロネコヤマトで誕生日プレゼントにと帽子を送りました。明日には届くと思います。僕の気持ちです。どうぞ使って下さい。遅くなってすいません」しゃべることができない彼に代わって、職員が、この一週間以上にわたって拒食するという行動で伝えようとした彼の気持ちを想像しながら、精一杯通訳する。彼は電話口で、何やら「ワーワー」と唸っていたらしい。

そして、彼はこの後、十日ぶりに食事をとった。体重減八キロ。

彼の初めての母親への誕生日プレゼントだった。

❖ ❖ ❖ ❖ ❖

「どうして、母親の誕生日が、入所施設暮らしのR男さんがわかるの？」

—普通に考えれば、障害の重いR男には当然わかる術はありません。家庭暮らしであれば、家族の誰かがふと漏らした言葉にヒントが生じるかもしれませんが、入所施設では母親の誕生日が話題になるなんてことは絶対にありませんから。テレパシー？超能力？…なにを非科学的なことを…—

「誕生日プレゼントをしたいことは、よくわかるけれど、なぜ拒食というような、ひょっとしたら命にかかわるかもしれないことを通して、それを伝えようとするの？」

—絶対にわかってくれると思うから始められるんだと、もちろん無意識的にですけれど。職員集団が、ある意味、試されているわけですが、それは信頼の上に成り立っていると考えられると思います。いつでも彼らの宿題は、自分たちのその時持っている能力のちょっと上に設定されているように感じます。僕らがちょっと頑張れば手が届きそうな、そんなところに。絶対わからないだろう宿題を彼らは出さないのです。とても良い奴らなんです。ちょっと伝え方が、無茶苦茶ですけどね。それでもしゃべることができない人にとって、伝える手段はそう多くはありません。せいぜい拒食、てんかん発作。いつでも命がけです。それほど人間は伝えるために生まれて来ているということですよ。—

WELCOME TO SATORU WORLD

知的障害入所施設明星学園における心のケア

<http://homepage3.nifty.com/myojo-satoru/>